

小学校における外国語授業で活用できる楽曲の選定と指導法の提案  
—外国語リスニング研究の知見から—

山 内 優 佳

Suggestions of English Songs and Teaching Approach for Elementary School  
Foreign Language Classes:  
From the Perspective of Foreign Language Listening Research

Yuka Yamauchi

This study suggests (a) some English songs that are appropriate for Japanese elementary school pupils in the English class and (b) a teaching approach for introducing the songs in the classroom. According to the content section of the teaching guide for the Course of Study, songs and chants are included as part of foreign language activities for students “to become familiar with the sounds and rhythms of the foreign language, to learn its differences from the Japanese language, and to be aware of the interesting aspects of language and its richness” (MEXT, 2008, p. 11). However, the textbook does not emphasize the teaching of English songs because of the difficulty in introducing them to senior elementary graders. Therefore, this study examines seven English songs based on (a) their popularity among English-speaking children (three songs), (b) the Japanese students’ familiarity with them (two songs), and (c) the pupils’ developmental stage (two songs). Further, it discusses how to teach the above songs by reviewing foreign language listening research. Finally, it examines some pedagogical considerations—the extent to which teachers should teach the songs (e.g., contents, linguistic features, and background information).

キーワード

外国語活動 Foreign Language Activities, 歌 Songs, リスニング指導 Listening Instruction

所属

広島文化学園大学 Hiroshima Bunka Gakuen University

学芸学部 Faculty of Arts and Sciences 子ども学科 Department of Childhood Studies

## 1. 外国語活動における英語の歌の取り扱い

平成20（2008）年告示の小学校学習指導要領では、外国語活動の内容として「外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付くこと」（文部科学省、2008、p. 11）が挙げられ、その中で、歌やチャンツを活用することによるリズムとイントネーションの体得について述べられている。また、英語の歌は小学校段階においても導入が可能なオーセンティックなリスニング教材としてもとらえることができ、授業内

で自然な発音の英語を耳にする機会を増やすことにもつながる。しかしながら、現行の *Hi, friends!*（文部科学省、2012a, 2012b）では英語の歌の取扱いが非常に少なく、2年間（*Hi, friends! 1* および *2*）を通して、Hello Song と Sunday, Monday, Tuesday の2曲のみが取り扱われている。そのため、授業内において英語の歌を導入するためには、授業を担当する教員等が選曲し、音源の準備を行う必要がある。5～6年生に対する外国語授業の教科化と、3～4年生への外国語活動導入早期化が行われることにより、5～6年生で「読むこと」および

「書くこと」の導入, 3・4年生では絵本の読み聞かせ等が注目されている(文部科学省, 2016a, 2016b)。この流れにより, 外国語活動の指導内容や方法として, 楽曲の活用は重要性や活用の可能性が認識されながらも, オーセンティック教材としての楽曲の活用が下降の一途をたどることが予想される。

上述のように英語の歌やチャンツの取扱いが推奨される一方で, 導入の効果を疑問視する見解や, 児童の否定的な反応があることも明らかになっている。小学校5～6年生を対象に外国語活動嫌いの要因を調査した辻(2011)の調査では, 英語や英語授業に対して肯定的な態度ではない児童<sup>i</sup>のうち, 3割を超える児童が歌やチャンツの活動を「嫌い」と答えた。その理由

としては, 歌の意味がわかりにくい, 発音そのものやりズムに乗って発音することが難しいという意見が挙げられた。児童を対象として行われた上記の調査の他, 教員を対象とした調査においても, 高学年に対して歌やチャンツを導入することへの難しさや不安が指摘されている(川井, 2010)。平成22(2010)年から配布されている現行の *Hi, friends!* (文部科学省, 2012a, 2012b) と, その前身である『英語ノート』(文部科学省, 2009a, 2009b) を比較すると, *Hi, friends!* への移行とともに歌の取り扱いが削減されている事実も(表1), 学校現場における取り扱いの難しさを反映したものであると考えられる。

表1 「Let's Sing」の枠組みで教材に掲載されている歌の一覧

楽曲名	『英語ノート』		<i>Hi, friends!</i>	
	学年	単元	学年	単元
Hello Song	5	Lesson 2 I'm happy.	5	Lesson 2 I'm happy.
Ten Steps	5	Lesson 3 How many?		取扱いなし
Twenty Steps	5	Lesson 3 How many?		取扱いなし
Head, Shoulders, Knees and Toes	5	Lesson 3 How many?		取扱いなし
Sunday, Monday, Tuesday	5	Lesson 8 I study Japanese.	5	Lesson 8 I study Japanese.
The Alphabet Song	6	Lesson 1 That's right.		取扱いなし
Thirty, Forty..., One Hundred	6	Lesson 2 Aa Bb Cc		取扱いなし

注 『英語ノート2』において Happy Birthday to You が掲載されているが, 構成上の分類は Let's Sing ではなく Let's Enjoy であること, また, CD に音源が含まれていないことを理由に, 表中には提示していない。

『英語ノート』と *Hi, friends!* における楽曲の扱いの差は, 表1に示した取扱い数のみではなく, 歌詞の違いも見られる。下記(1)は『英語ノート』, (2)は *Hi, friends!* における Hello Song の歌詞である。

- (1) Hello. Hello.  
Hello, how are you?  
I'm fine. I'm fine.  
I hope that you are, too.  
(文部科学省, 2009a, p. 11)

- (2) Hello. Hello.  
Hello, how are you?  
I'm good. I'm good,  
I'm good, thank you. And you?  
(文部科学省, 2012a, p. 8)

『英語ノート』では *how are you* と *you are, too* が (/ju:/ と /tu:/), *Hi, friends!* では *how are you* と *And you* が (/ju:/ と /dʒu:/), 文末で類韻を踏んでいるため, 文末部分の音の響きには大きな変化がない。それでもなお, 改訂に伴い, 原曲の *I hope that you are, too* を *I'm good, thank you. And you?* に変更したのは, 上述の辻(2011)で挙げられた, 「発音そのものやりズムに乗って発音すること」の難しさを軽減するためであると考えられる。当該箇所が発音することを難しくする要因として考えられるのは, 原曲の *that you* 部分における音の同化 (*t + y*) である。改訂後は *thank you* と *And you* で同化が生じているが(それぞれ *k + y*, *d + y*), 児童にとっては, ひとかたまりの表現としてより馴染みのある音声が用いられるようになっている。ここで挙げた, Hello Song にみられる改作

は、外国語音声の特徴をおおむね引き継いでいる点においては問題ないが、日常的な挨拶表現として授業内でも用いられる Thank you. And you? の表現に固定することにより、原曲の「音声やリズムなどに慣れ親しむ」(文部科学省, 2008, p. 11) 機会は失われているともいえる。

ここまで示した楽曲の取扱いの現状を鑑みると、1つの矛盾点が浮かび上がる。「5, 6年生の知的好奇心を満足させるのが難しい」(川井, 2010, p. 69) 等、幼児向けの歌の活用が高学年という発達段階にそぐわないこと(高橋, 2006; 長谷川, 2011)が指摘される一方で、『英語ノート』と *Hi, friends!* に掲載された Hello Song の比較からも分かるように、幼児向けの歌がさらに簡素化された形で高学年に提供される方向への改訂が行われているのである。そこで本稿では、英語の楽曲の活用可能性を高めるために、楽曲の選定を行う。また、楽曲の対象年齢、児童の学年(発達段階)から、指導内容の分析を行い、最後に指導法を提案する。

## 2. 楽曲の選定と分析

『英語ノート』から *Hi, friends!* への改訂に伴い削除された楽曲に、Ten/Twenty/Thirty Steps (原曲は Seven Steps) と Thirty, Forty, ..... One Hundred がある(表1)。いずれも、基本的な英単語に慣れ親しむこと(あるいは習得すること)を目的とした数え歌である。これらの楽曲が削除された背景には2通りの理由が推察される。第一に、歌詞に含まれる英語表現が、ほとんど学習目標の言語項目(ここでは数字)のみを使用したものであることである。繰り返しの活動を好む低学年であれば問題なく導入できる可能性があるため、楽曲の使用が高学年の発達段階に合わないと言い換えることもできる。第二に考えられる理由は、発音することの難しさである。具体的には、Ten (Seven) Steps では1音節の語彙を列挙している一方で、Twenty Steps や Thirty Steps には2音節の語彙が多く含まれることにより、1拍で発音する音節が増え、児童にとっては発話速度が上がったとを感じるであろう。ここまですとまとめると、数え歌削除の背景には、低学年向けともいえる語彙使用と、音声面の困難度の高さという、相反する2つの理由の可能性が挙げられる。このように、学年の発達段階や英語習熟度に合致す

るか否かは、単純に「英語の歌を導入することが発達段階に合わない」と一括りにするのではなく、楽曲ごとの困難点や、導入に適した学年を検討する必要があるといえる。

本節では、(a) 英語圏で広く親しまれ、歌われている楽曲、(b) 日本に住む児童にとって身近な楽曲、(c) 発達段階に応じた楽曲、という3つの観点から、小学校における外国語活動(あるいは外国語科)で使用可能であると考えられる楽曲を示す。それぞれの楽曲について、指導内容として注目すべき言語項目を指摘し、導入可能な学年を提案したい。

### 2.1 英語圏の子ども達に慣れ親しまれている英語の歌

英語圏で慣れ親しまれている歌の具体例として、以下の8曲を挙げる。この観点においては、英語圏の幼児が学習のために歌うものや、*Mother Goose* に含まれるものを挙げる。歌そのものの対象年齢が低いことから、外国語活動の早期化に対応しうる曲目である。一方で、高学年に対して導入する際には、音声変化(連結や同化、弾音化)や、歌の背景となる歴史の学習等、英語や文化に関する知識・理解を促進する指導をすることが可能である。

- (3) The Alphabet Song  
A B C D E F G  
H I J K L M N  
O P Q R S T U  
V W and X Y Z  
Happy. Happy. I'm happy.  
I can sing my ABC

かつて the Alphabet Song は『英語ノート2』(文部科学省, 2009b)において上記の歌詞で扱われていた。Alphabet Song を扱うことができる単位としては、アルファベットを導入する単位が該当する。かつての『英語ノート』では第6学年における取り扱いであったが、より早い次期での導入も考えられる。例えば、*Hi, friends!* でアルファベットの初出である第5学年での導入が可能である。あるいは、今後外国語活動が早期化した場合には、国語科でローマ字の学習が行われる第3学年での導入も可能である。Alphabet Song を用いることにより指導可能な言語項目としては、第1にアルファベットの順序、そして順序に関連して辞書指導を行

う可能性が見いだせる。第2に、音声の指導が可能である。『英語ノート』の音声CDに収録されていた上記の歌詞では、日本人の児童に対する配慮のためか、先述の Hello Song 同様、アルファベットが歌われる箇所でも簡素化が生じている。具体的には、通常 L-M-N-O-P/elemeŋpi:/ が連結して発音される箇所において、当該歌詞においては L/el/-M/em/-N/en/ と、1文字ずつ連結せずに発音されている。どちらの音声教材を使用するのかについては、児童の実態に合わせる必要がある。しかしながら、英語の音は連結があるという知識の習得と、自然な英語の音声のつながりに慣れ親しむという観点からは、原曲の使用が推奨されるべきである<sup>ii</sup>。

- (4) London Bridge is falling down,  
Falling down, falling down,  
London Bridge is falling down,  
My fair lady.

本楽曲も対象年齢は低く、遊戯に用いられる歌である。異なり語の割合<sup>iii</sup>が47%であるが、歌詞に含まれる17語中、14語が1,000語レベルの語彙、残りの3語が2,000語レベルに収まる。基本的には *London Bridge is falling down* の表現の繰り返しであるため、言語面の難易度は低い。そのため、導入する学年としては低学年や中学年程度が考えられる。あるいは、仮に高学年に導入するのであれば、ロンドン橋が何度も落ちることにより様々な材料で橋が建設されたことを歌う2番以降の歌詞や、橋にまつわる歴史を取扱うことが考えられる。

- (5) Little Bo-peep has lost her sheep,  
And can't tell where to find them;  
Leave them alone, and they'll come home,  
Bringing their tails behind them.

Mother Goose に含まれる、幼児向けの楽曲である。内容は幼児向けであることから、およそ85%を1,000語レベルの語彙が占める。一方で物語仕立ての歌詞であるために、異なり語の割合が88% (22/25) と高く、現在完了形の使用、命令形 + and の構文、疑問詞 + to 不定詞の構文等、文法的にはやや複雑な歌詞である。そのため、導入するのは高学年が適切であると考えられる。また、この楽曲の登場人物である

Bo-Peep は、ディズニー映画『Toy Story』において、羊飼いの杖 (shepherd's crook) を持った人形としても登場している。楽曲を耳にすることがはじめてであっても、児童が知っている映画やキャラクターとの関連から楽曲を身近に感じることができる可能性がある。

## 2.2 日本で慣れ親しまれている英語の歌

日本で慣れ親しまれている楽曲の具体例として、以下の2曲を挙げる。この観点で挙げる楽曲は、日本で親しまれていると同時に英語圏の子どもたちにも馴染みがある楽曲であるが、旋律に馴染みがある分、英語面に着目して導入・指導することが可能であると考えられる。

- (6) Silent night, Holy night  
All is calm, all is bright  
'Round you virgin Mother and Child  
Holy Infant, so tender and mild,  
Sleep in heavenly peace,  
Sleep in heavenly peace

クリスマスソングとして有名な「きよしこの夜」である。異なり語数の割合は70%である。低頻度語としては *virgin* や *heavenly* (それぞれ6,000語レベル、8,000語レベル) が出現する。また、音声面においては *and* の弱化、*sleep in* など子音と母音の連結が含まれるが、楽曲そのものの旋律を知っていることと、テンポが遅いことから、中学年への導入も可能であると考えられる。

- (7) If you're happy and you know it, clap your hands.  
If you're happy and you know it, clap your hands.  
If you're happy and you know it,  
And you really want to show it,  
If you're happy and you know it, clap your hands.

日本語でも「幸せなら手を叩こう」として知られる楽曲である。歌詞に含まれる異なり語の割合は32% (14/44) と低く、使用される語彙の9割が1,000語レベルであり、平易な英語の繰り返しで構成されている。歌詞の平易さが楽曲の難易度を下げる一方で、歌うためには1拍中に複数の語を発音するためのリズム (弱強弱



強), また, それに伴う音声の弱化や連結が必要とされるため, 発音(歌唱)の難易度は低くない。中学年には音声に慣れ親しむ目的でリスニングや Total Physical Responses の一環として導入可能と考えられるが, 適切に発音することを目的とするのであれば, 高学年を対象とすることも可能であろう。

### 2.3 発達段階に応じた英語の歌

現在外国語活動で用いられている楽曲が, 英語圏では幼児から小学校低学年で歌われるものが多く, 小学校高学年という発達段階にそぐわないことは, これまでにも指摘されている(e.g., 高橋, 2006; 長谷川, 2011)。本稿でも示したように, 英語圏で子ども達に親しまれる楽曲は対象年齢が低いものが多く, 高学年への導入の困難さや, 工夫の必要性がある。そこで, 高学年の発達段階に見合う楽曲としては, 小学校音楽の教科書より例を挙げたい。広島県内19市町村のうち12市町で使用されている音楽教科書『小学生の音楽』(小原・飯沼・浦田[監修], 2015a, 2015b, 2015c)に掲載されているもののうち, 歌詞が平易であること, 小学生が歌うことが想定されていること(オペラやクラシック等, 鑑賞用としての掲載ではないこと)を条件とするならば, 以下の3曲が, 外国語活動でも取り扱いが可能であるといえる。ただし, 音楽の教科書に掲載されている楽曲であるため, 導入に際しては専科教員が担当する音楽科との連携を取ることが必須である。

- (8) What a friend we have in Jesus,  
All our sins and griefs to bear  
What a privilege to carry  
Everything to God in prayer  
O what peace we often forfeit,  
O what needless pain we bear,  
All because we do not carry,  
Everything to God in prayer

『小学生の音楽』では第6学年で取り扱われる「星の世界」(小原他, 2015c)の原曲で, 賛美歌の What a Friend We Have in Jesus である。異なり語の割合は60%で, 歌詞内の78%が1,000語レベルの語彙である。表現としては感嘆文が多用されており, それほど多くの文法項目が含まれてはいないが, privilege, grief, forfeit (それぞれ4,000語レベル, 5,000語レベ

ル, 9,000語レベル)など, 日常生活で小学生には馴染みがないであろう低頻度語が含まれることにより, 意味理解を求めるには困難が伴うことが予想される。また, 音声面において子音と母音の連結や, 母音の弱化, 脱落が適切に発音できなければ旋律に合わせて歌うことが困難である。このことから, 対象は第6学年として, 異文化理解を含めた内容理解にも十分に時間をとる必要がある楽曲である。

- (9) Michael, row the boat ashore, Halleluja  
Michael, row the boat ashore, Halleluja.

『小学生の音楽』では第5学年で取り扱われる楽曲で, 教科書内においては英語の歌詞とカタカナによるふりがなが掲載されている(小原他, 2015, p. 24)。1番のみを取り扱うのであれば, 歌詞は上記の通りで6語が使用されるのみである。そのため, 音楽教科書に掲載されている第5学年に導入する際には, 比較的詳細な言語面への指導が可能になる。例えば, 音声面で *boat ashore* が連結していることや, 音楽の教科書に掲載されているカタカナ表記と英語の発音の違いに気付くこと等に, 焦点を当てることができる。さらには, 2番以降の歌詞を取り扱うことや, 南北戦争の歴史や人種差別の問題などの背景知識について十分触れることも可能であると考えられる。

- (10) Edelweiss, Edelweiss,  
Every morning you greet me  
Small and white,  
Clean and bright  
You look happy to meet me  
Blossom of snow  
May you bloom and grow  
Bloom and grow forever  
Edelweiss, Edelweiss,  
Bless my homeland forever

『小学校の音楽』では第3学年で取り扱われる楽曲である(小原他, 2015a)。リコーダーでの指導に用いられることもあり, 馴染みのある旋律であるといえよう。しかしながら, 言語面に注目すると, 異なり語の割合が73% (27/37)であり, 1,000語レベルの語彙の使用も65%に満たない。そのため, 指導可能な言語項目としては豊富な語彙に焦点を当てることができる。あ

るいは, *greet me* と *meet me*, *white* と *bright*, *blossom of snow* と *bloom and grow* といった頭韻と脚韻に気付くことで, 音の響きを味わうことを目的として使用することも可能である。導入は教科書で扱われる第3学年とすることもできるが, 語彙の豊富さを踏まえ, 高学年の外国語活動等で取り扱うことにより, 第3学年のリコーダー演奏と異学年交流をすることもできよう。

### 3. 外国語リスニング指導の理論を踏まえた指導法の提案

ここまでの分析で, 語彙の難しさや音声面における困難点に加え, 対象年齢が幼児向けであるのか, 高学年向けであるのかといった内容面の分析が行われた。冒頭でも述べたように, 児童が英語の歌に対して抵抗感をもつ理由としては, 「意味が分からない」「発音できない」(辻, 2011) という, 児童の英語に関する知識と技術の不足によるものが挙げられる。これまでの外国語活動においては, 音声やリズムに慣れ親しむことが主眼に置かれてきた。しかし, 今後の教科化として知識・技能の指導が行われることを踏まえるならば, 慣れ親しませると同時に, 児童が「分かる」「できる」という達成感を感じさせる指導を検討すべきである。

英語リスニングの困難度を高める要因には, リスニング材料の, 言語の側面(発話速度やポーズの有無, 語彙等), 明示性, 構成, 内容(題材や登場人物識別のしやすさ等), 音声以外の支援がある(Buck, 2001)<sup>iv</sup>。前節の分析においても, 様々な楽曲について, 言語面(語彙や音声変化の多様性等)と内容面(対象年齢)の難しさが指摘された。そこで, 楽曲選定や指導の際に考慮すべき観点を図1で示すとおりに簡略化して示したうえで, 図中のⅠからⅣについて, 指導上の留意点を述べたい。

#### (Ⅰ) 言語面および内容面の難易度が高い楽曲

Ⅰに示すように, 言語面および内容面が高い楽曲は, 高学年で取り扱うべきである。言語面のうち, 語彙に関しては, 繰り返し出現する語を中心に意味を確認しながら発話できるようにしたい。発音しにくい低頻度語については, 導入序盤では受容語彙を目指すにとどめ, 繰り返し歌うなかで, 発話可能になることを目指すと良いであろう。文構造が, 基本的な5文型の形

式を取らない場合は, あえて訳をせずに, 概要のみに触れることも可能である。

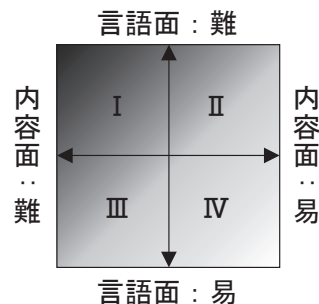


図1 英語曲の指導時に考慮すべき観点および難易度を表すイメージ

注 濃淡は楽曲の難易度を表しており, 濃い色が難しい楽曲を, 薄い色が易しい楽曲を意味する。

学習者が音声言語の聞き取りや内容理解に困難を示す要因のひとつに, 既知の単語を音声で認識できないことが挙げられる(Goh, 2000)。旋律の中で語句に連結や脱落(場合によっては, 北米にみられる *t* の弾音化)といった音声変化が生じている場合, 児童にとって「分からない」「できない」につながる大きな要因となりうる。導入学年が高学年であれば, 文字を提示しながら指導することができよう。文字提示の根拠としては, 一連の音声を語や語句に切り分ける(分節化する)ことを目的として, 音声を聞くことと文字を確認することの繰り返しが必要であることが挙げられる(Hulstijn, 2003)。しかしながら, 小学校高学年への楽曲導入時における文字の活用については, 十分な調査・研究が行われていない(青木・加藤・中洲・池上, 2005<sup>v</sup>)。楽曲導入時の文字活用の有効性については, 特に言語面における難易度との関連から, 今後研究が期待されるところである。

言語面が難しいことに加え, 内容面が難しい場合は, 先に述べたように概要にのみ触れることが可能であるが, 楽曲の背景にある歴史や文化的な記述については, 社会科等の他教科への興味・関心に応じて, 取り扱う比重を検討する必要がある。すなわち, 「分かる」「できる」を「歌詞の意味が分かる」「旋律に乗って歌うことができる」とするならば, 言語項目へ注目し, 難易度が高い内容面には重きを置かないが, 「楽曲の背景が分かる」ことまでを目的とするのであれば, 教科を越えて調べ学習をする等の幅広い活動に発展する可能性も考えられ

る。

## (Ⅱ) 言語面の難易度が高く、内容面が易しい楽曲

対象年齢が幼児向けの楽曲であるにもかかわらず、発話速度が速いといった楽曲がこの区分に当たる。言語面の難易度の高さについては、(Ⅰ)で述べたとおりである。しかしながら、内容面について、(Ⅰ)で示したような配慮を必要としないため、より言語項目について詳細に取り扱うことができる楽曲であるといえよう。対象学年は、(7)のIf you're happy and you know it, clap your handsで述べたように、目的に合わせて選ぶ必要がある。すなわち、中学年に導入するのであれば、歌うことを強制はしないが、高学年に導入するのであれば、発音できることを目標とするというものである。

## (Ⅲ) 言語面が易しく、内容の難易度が高い楽曲

この区分の楽曲であれば、言語面が易しいため、中学年においても児童が気軽に発音することが可能である。また、比較的詳細な言語の特徴への気付きを促すこともできるかもしれない。(4)のLondon Bridge<sup>vi</sup>や(9)のMichael, row the boat ashoreで示したように、高学年で導入するのであれば、内容面を深く味わうために、他教科での学習活動とも関連させることができる。外国語指導助手の英語話者の先生に、ストーリー・テリングのかたちで、背景の歴史等を伝えてもらうことも考えられる。

## (Ⅳ) 言語面および内容面が易しい楽曲

この区分の楽曲は、冒頭から述べられているような、高学年の発達段階にはすぐわない楽曲である。仮に高学年に導入するのであれば、これまで述べたように、言語面について児童自身が詳細な検討を行い気付きにつなげるような活動を行うことが考えられる。あるいは、異学年交流として高学年の「お兄さん・お姉さん」の立場で低学年の児童とともに取り組むことも可能であろう。

## 4. おわりに

本稿では、選曲の際の3つの観点(英語圏の子ども達に親しまれている楽曲、日本で親しまれている楽曲、発達段階に応じた楽曲)を示し、具体例とともに、指導のポイントとなる言

語項目について述べた。今後、高学年で外国語活動が教科となることを踏まえれば、高学年においては英語の楽曲は慣れ親しむためのみならず、発音できることを目標として含みうる。「分かる」「できる」に焦点を当て、本稿の第3節においては、単語認知や分節化を促進するために積極的に文字を活用することが提案された。また、楽曲利用時の文字使用に関しては、今後の研究が期待されることであると指摘された。内容面の困難度が高い場合は、音声など言語面だけではなく、その楽曲の成り立ちや文化を学習することを促進し、外国語活動(外国語科)以外の学びへとつながることも期待されよう。

小学校の外国語活動(外国語科)が専科ではなく担任教員が中心となって実施されている場合、楽曲の選定や分析は困難を極める。そのため、Hi, friends!等の教材における提示と、指導の手引きとしての指導法や指導ポイントの提示が期待されることである。また、本稿では楽曲の難易度を、異なり語数や語彙レベル、音変化の有無といった観点で提示したが、学習者である児童にとって、どの観点の困難度がどの程度高ければ「難しい楽曲」と感じられるのか、といった点も、今後明らかにされることが期待される。

## 引用文献

- Buck, G. (2001). *Assessing listening*. Cambridge University Press.
- Goh, C. (2000). A cognitive perspective on language learners' listening comprehension problems. *System*, 28, 55-75.
- Hulstijn, J. H. (2003). Connectionist models of language processing and the training of listening skills with the aid of multimedia software. *Computer Assisted Language Learning*, 16, 413-425.
- Révész, A., & Brunfaut, T. (2013). Text characteristics of task input and difficulty in second language listening comprehension. *Studies in Second Language Acquisition*, 35, 31-65.
- 青木信之・加藤智子・中洲かおり・池上真人 (2005)「小学校英語活動における歌の導入とその方法—歌詞の与え方の観点から—」『教育学研究ジャーナル』第2号, 1-9.



- 小原光一・飯沼信義・浦田健次郎（監修）  
 (2015a)『小学校の音楽3』教育芸術社  
 小原光一・飯沼信義・浦田健次郎（監修）  
 (2015b)『小学校の音楽5』教育芸術社  
 小原光一・飯沼信義・浦田健次郎（監修）  
 (2015c)『小学校の音楽6』教育芸術社  
 川井一枝（2010）「小学校英語教育における歌とチャンツ―教員の意識調査を通して―」『小学校英語教育学会紀要』第10巻, pp. 67-72.  
 教育芸術社（n.d.）「文部科学省検定済み 教科書・指導書」[http://www.kyogei.co.jp/publication/textbook/h23\\_elementary\\_school/](http://www.kyogei.co.jp/publication/textbook/h23_elementary_school/)  
 高橋美由紀（2006）「小学校英語活動における歌やチャンツを活用した指導法」『学校教育学研究』第18巻, pp. 45-55.  
 辻伸幸（2011）「小学校外国語活動嫌いを誘発させる要因―学習者の質的データと量的データの分析を中心に―」『EIKEN BULLETIN』vol. 23, pp. 140-151.  
 長谷川修治（2011）「小学校英語教育における『歌・踊り・ゲーム』の研究」『植草学園大学研究紀要』第3巻, pp. 59-68.  
 広島県教育委員会（n.d.）「平成27年度に県内の市町立小学校で使用する教科用図書の採択結果」<http://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/kyouiku/h27shiyoukyoukasyo.html>  
 文部科学省（2009a）『英語ノート1』東京書籍  
 文部科学省（2009b）『英語ノート2』東京書籍  
 文部科学省（2012a）*Hi, friends! 1*. 東京書籍  
 文部科学省（2012b）*Hi, friends! 2*. 東京書籍  
 文部科学省（2016a）「小学校の新たな外国語教育における補助教材（Hi, friends! Plus）の作成について（第5・6学年用）」[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/1355637.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1355637.htm)

[mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/1355637.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1355637.htm)

文部科学省（2016b）「小学校の新たな外国語教育における補助教材（Hi, friends! Story Books）の作成について（第3・4学年用）」[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/1370103.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1370103.htm)

- 
- i 「英語が好きだ」「英語の授業は好きだ」「英語の授業は楽しい」という項目に、どちらでもないと回答した児童（ $n = 19$ ），および否定的に回答した児童（ $n = 36$ ），合わせて55名に対してインタビュー調査を行っている。
- ii Zより後ろについては多様な歌詞があるため、本稿では触れない。
- iii （異なり語の割合）＝（使用される単語の種類）／（全語数）で計算される。割合が低いことは、同じ語句が繰り返し使用されていることを意味する。
- iv より具体的な指標については Révész and Brunfaut（2013）を参照されたい。
- v 青木・加藤・中洲・池上（2005）の調査によると、指導方法の違い（音声のみ、アルファベット提示、かな提示）で「歌えること」に違いが生じるのは中学年のみであった。具体的には、かな表記による指導で「歌える」と答える割合が最も高く、続いてアルファベット表記、最後に音声のみの提示が続いた。
- vi London Bridge は、低学年向けの遊戯の歌であるともいえるが、歴史的背景までを学ぶとすれば、深い内容の教材として扱いうる。